

◎「関西大学アスリート勉強会」を開催

## 文武両道! サッカー一部の勉強会を全体育会に拡大



関西大学体育会サッカー部は1月8～10日、学業とスポーツの両立を目指す取り組みとして定期開催している学部別勉強会を全体育会に拡大した「関西大学アスリート勉強会」を千里山キャンパスで開催した。

部員数約250人、関西学生リーグ1部に所属するサッカー部は、部則で1学期15単位以上の修得を基準とし、満たさなければ試合出場を制限すると定めている。勉強会は2013年、基準を満たさない部員の増加に危機感を抱いた部員が、定期試験に合わせた学部別勉強会や履修登録会を自主的に開催したのが始まり。以来、勉強の得意な4年次生がリーダーとなって下級生を指導し、学業



支援の輪は広がりを見せている。その成果は目覚ましく、最近の4年間における部員の基準達成率は99.7%にも及ぶ。

2018年度春学期の学部別勉強会と履修登録会では、他の体育会にも呼びかけ、応援団バトン・チアリーダー部や陸上競技部、弓道部などが新たに参加。その好評を受け、今回は全体育会部員を対象とした本格的な拡大勉強会を開催した。当日は芝井敬司学長による激励で始まり、学生が講師となって各学部の学習ポイントなどを情報共有。アメリカンフットボール大学日本代表選手やアイススケート部の宮原知子さん(文3)も参加し、学びを深めた。

◎図書館学習支援講座「書評のススメ!」の関連企画

## MARUZEN & ジュンク堂書店梅田店にて学生による「本の帯」と「書評」を展示



▲「書評のススメ!」最終日にそれぞれの作品を手にする受講生ら

1月16日～2月15日、MARUZEN & ジュンク堂書店梅田店にて、関大生が作成した「本の帯」と「書評」を活用した展示販売が実施された。

関西大学図書館は昨秋、丸善雄松堂、編集工学研究所、丸善ジュンク堂書店と協働し、学習支援講座「書評のススメ!」を開講。講

座では、17人の受講生が約1カ月間、自ら選んだ本と向き合い、専門家の指導を受けながら「本の帯」と「書評」を完成させた。最終日には講評会も開催され、それぞれが身に付けた編集術や書評作成の面白さ、難しさといった成果をインタビュー形式で発表。学内外からの投票による「OBI-1グランプリ」、有識者の選考による「書評のススメ!」の各賞3人ずつが選出され、表彰式が行われた。

このたびの展示販売では、講座で学んだ学生が作成した帯を巻いた書籍を実店舗で販売するとともに、書評を展示した。初日には、6人の受講生が書店員の指導を受けながら書籍の陳列やメッセージボードの作成を担当。自身の学習成果である作品を自らの手で陳列・展示することで、読書の魅力を再確認できる貴重な機会となった。



◎KU-ORCAS研究会「近代東アジアにおける西洋料理の伝播と受容」を開催

## 150年前のレシピ本を読み解き、西洋料理が東アジア文化に与えた影響を探る



2月9日、千里山キャンパスにおいて、関西大学アジア・オープン・リサーチセンター(KU-ORCAS)が、研究会「近代東アジアにおける西洋料理の伝播と受容」を開催した。

KU-ORCASは、東アジア文化研究に関する資料のデジタルアーカイブを構築すると共に、東アジア文化研究のネットワークをつなぐハブ拠点として、オープン・プラットフォームの形成と活用を推進している。

今回の研究会は、1866年に上海で出版された西洋料理のレシピ本『造洋飯書』を糸口に、西洋料理が東アジアに浸透する過程において、食文化だけでなく言語や価値観、文化、市民生活にどのような影響を及ぼしたのかを探ることが目的。

当日は、センター長である外国語学部の内田慶市教授が、『造洋飯書』の意味やアヘン戦争後の上海の変化等について解説。続いて、龍谷大学の余田弘実教授から、料理本の言葉の変遷などから日本では19世紀前半までに西洋料理を受入れる素地が整っていたことや、梅花女子大学の東四柳祥子准教授から、明治時代の市民の暮らしに西洋料理が与えた影響について説明があった。最



後に辻静雄料理教育研究所の八木尚子副所長が、19世紀ヨーロッパにおけるフランス料理の歴史と日本への影響について講演した。

今後は、料理を中心とした当時の文化背景や人物にも焦点をあてた研究展開を予定しており、レシピの再現やデータベース化により、研究成果をオープンにし、共有する試みも行っていく。

◎北大阪ミュージアム・ネットワークのシンポジウムを開催

EXPO'70

## 地元北大阪から'70大阪万博開催までの歩みを検証する



1月12日、関西大学梅田キャンパスにて、北大阪ミュージアム・ネットワーク主催のシンポジウム「博覧会の歩み—'70万博への道—」が開催された。

北大阪の地域文化資源の整備や活用事業を展開する「北大阪ミュージアム・ネットワーク」は、平成30年度文化庁「地域と共働した美術館・歴史博物館創造活動支援事業」の1つ。現在、同ネットワークには、関西大学博物館をはじめ、EXPO'70パビリオン、国立民族学博物館や大阪日本民芸館など北大阪地域にある56のミュージアムが加盟している。

今回のシンポジウムは2025年の大阪万博開催決定を受け、1970年の大阪万博会場となった北大阪から、'70万博が開催に至るまで

の歩みを検証するものである。第一部の講演会には6人の研究者が登壇。国際日本文化研究センターの井上章一教授が「EXPO'70と京大阪」をテーマに基調講演を行ったほか、各館の5人の研究者から、それぞれ博覧会に関する研究報告があった。第二部のパネルディスカッションでは、1970年の大阪万博を実際に体験したパネリストから当時の様子や楽しみ方などが披露され、約200人の聴講者が興味深く聞き入っていた。



▲万博を広報するためのディスプレイボード (大阪大学総合学術博物館 蔵)



パネルディスカッションの様子